

静岡県におけるミカンサビダニの多発要因とその対策

○土田祐大・増井伸一

静岡県農林技術研究所果樹研究センター

ミカンサビダニは世界中のカンキツ主要産地に広く分布している。本種による温州みかんへの被害は、本種が果実肥大期に吸汁した場合には早期被害として果皮が鮫肌状となり、その後果皮を広範囲に吸汁した場合には後期被害として果皮が褐変し、果実外観を著しく損ねる。そのため、ミカンサビダニはカンキツ栽培において重要な害虫のひとつである。

カンキツ栽培では黒点病の防除を対象としたジチオカーバメート系薬剤が年間複数回散布されており、ミカンサビダニの同時防除剤として位置づけられている。しかし、1990年代に西日本で本系薬剤に対する抵抗性を獲得した個体群が出現し、深刻な被害を与えた。近年は静岡県でもミカンサビダニが多発傾向にあり、ジチオカーバメート系薬剤による殺虫効果の低下が疑われた。

カンキツ栽培ではミカンハダニを対象として、これまで年間4～6回の殺ダニ剤散布が行われてきた。静岡県では薬剤抵抗性対策として1999年に土着天敵を活用したミカンハダニの防除に関する研究を始めた。現在では冬季～4月のマシン油と9月の殺ダニ剤の2回の防除が基本となり、年間の殺ダニ剤散布回数が半減した。一方、ミカンサビダニは芽の鱗片内で越冬するため冬季のマシン油散布は効果的ではない。また、本害虫は夏季に急激に個体数が増加するため、9月の殺ダニ剤のみでは十分な効果が得られない事例がある。これらのことからミカンサビダニ多発地域の生産者は夏季にミカンサビダニを対象とした薬剤を追加散布する必要性がでてきている。本害虫に卓効のある薬剤のなかには土着天敵に影響の強いものが多く、ミカンハダニのリサージェンスが起こる事例もみられる。

以上のことから、ミカンサビダニの防除コストの削減とミカンハダニのリサージェンスを防ぐためには、天敵に影響が少なくミカンサビダニに効果の高い薬剤を選抜するとともに、土着天敵を活用したミカンサビダニの防除体系を構築する必要がある。

本講演ではミカンサビダニの多発要因を本害虫の生態や薬剤検定結果から考察するとともに、現地栽培ほ場において土着天敵を利用したミカンサビダニ防除体系について検討した結果を報告する。

Outbreaks of pink citrus rust mite, *Aculops pelekassi* and its control measure in Shizuoka prefecture.

Yuta Tsuchida, Shinichi Masui

Fruit tree Research Center, Shizuoka Prefectural Research Institute of Agriculture and Forestry